

未成年の装束

1 空頂黒幘くうちょうこくさく

天皇はじめ皇族男子が未成年の御装束を御召しの際に用いられる一種の額当て。幘とは髪を包む布の意味である。羅らと呼ばれる薄い絹織物に十六葉八重表菊紋を刺繍して2枚を重ね、縁を黒漆で固め三山形としたものを3片並べて額に結ぶための紫色の紐に綴付けたもの。山の高さは約15cm、紐には瑞鳥と唐草などが刺繍されている。

2 闕腋袍けってきのほう

天皇はじめ皇族男子が未成年の折に召される御装束や、武官の装束に用いられてきた腋が縫われていない袍。男性皇族が召される闕腋袍は浅黄色に雲鶴文を織り出した生地、夏の料は穀織こめ（文様を織り表す組織が、穀物の粒のように見える絹織物）で裏地の無い単衣の仕立てである。後身の長さは約6m（鯨尺(37.88cm)で16尺）。

3 表袴うえのはかま

下袴としての赤の大口袴の上に重ねて穿くことからこの名称がある。表は白地の浮織で窠かに霰あられの文様を表し、裏地には赤の平絹へいけんを用いたズボンのような前開き構造の袴である。

4 絲鞋しかい

白絹の太撚糸で編んで作られた編み靴で底は白革を張り、白の組紐で足首に結び留めて用いる。

5 石帯

グラスファイバーの地に黒漆を塗った本帯ほんたいと上手うわで二部式のベルトで、表面には雲鶴文を彫った瑪瑙の飾り石を11個とりつけている。後ろ腰に着ける本帯と、バックルに相当する上手を正絹の組紐で結び連ね、装束全体を締めて使用する。

6 帖紙たとうがみ

紅の鳥子紙に金銀切り箔を置いたもの。

7 笏

材質はいちい。

8 よこめおうぎ 横目 扇

元来は板目（横目）の薄板を閉じ連ねた扇であることから横目扇の名称があるが、現在は檜杣目の薄板を閉じ連ねた檜扇で、表裏ともに彩色を施す。親おや橋ぼねには6色の飾り糸と糸花いとぼなと呼ばれる造花を付ける。

成年の装束

1 冠

表面に羅と呼ばれる薄い絹が貼られ、その上に黒漆を塗り作られたもの。十六葉八重表菊の御紋章を配した有文の冠。太い紙^{こびねり}縫^{かけ}の掛^お緒を冠の後方から掛けて頭頂で交差し、顎の下で結び固定する。

○燕尾^{えんびのえい}纓

加冠の儀に御召しになる冠に附属する燕尾纓は、冠と同じ黒^{くろ}羅^らの地に、十六葉八重表菊の御紋章が刺繍されている。同じものが2枚重なった構造で、冠の付け根から垂^{すい}下^かし、左右均等に裾開きに幅が広がり、先端は丸くなっている。平安朝に用いられた纓の古い様式で、特に加冠の際に用いるものとして伝えられてきた。

○垂^{すい}纓^{えい}

冠と同じ黒羅に、十六葉八重表菊の御紋章を刺繍する。燕尾纓から変化した平安時代後期以降にみられる纓の様式で、冠に差し込む纓の付け根から片方に袖が付くような形の長方形である。天皇の御冠の纓が御^ご立^{りゅう}纓^{えい}であるのに対し、纓を差す纓^え壺^{つぼ}のやや上で後方に曲げて垂れる様式からこの名称がある。纓の曲り方は身位により差があり、親王の垂纓は皇太子（皇嗣）の垂纓よりも強く曲げられている。

2 縫^{ほう}腋^{えき}袍^{ほう}

成年の文官が着用する腋が縫い綴じられた上衣。裾さばきの便のため、欄と呼ばれる横裂が裾周りに付けられるのが特徴で、左右の裾腋に張りだした部分の欄は蟻^{あり}先^{さき}と呼ばれる。夏の料は穀^{こめ}織の単衣で、皇族男子の袍は黒地に雲鶴文を織り出している。

3 表^{うえ}袴^{はかま}

未成年の闕腋袍の束帯の料と同じ。

4 鞆^{かのくつ}

束帯の際に使用する正式な履物。革製黒塗の深靴の一種で、上部に靴^{かせん}氈と^あか^かじ^かに^にぼ^たん^もん^んの^やま^とに^しき^きと呼ばれる赤地蟹牡丹文の大和錦が用いられている。

5 石帯

未成年の闕腋袍の束帯の料と同じ。

6 帖紙^{たとうがみ}

白檀紙に金銀の切り箔を押したもの。

7 笏

未成年のものと同じ。

8 檜扇

檜の白木の薄板を重ね閉じた木製の扇。親橋に、十六葉八重表菊紋が^{おきもん}置文としてあしらわれている。

※ 夏の料と冬の料は、素材の加工方法、織り方に違いがあり、夏の料の素材となるシルクは、繭から紡いだ生糸をそのまま使用するため張りがある。冬はシルク（繭から紡いだ生糸）を煮た（繭から紡いだ生糸をアルカリ性の溶液で精錬（「練る」と言う）した^{ねりいと}練糸も使用するため、相対的には光沢があり、柔らかい。